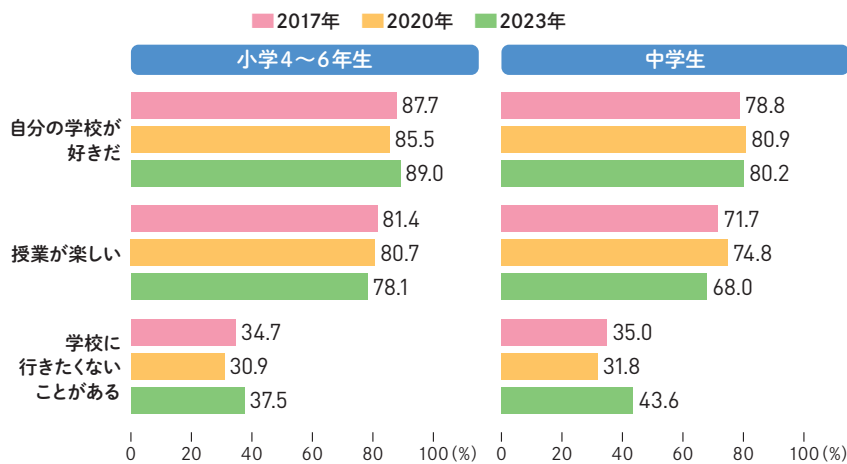


コロナ禍以降、子どもの通学意識や保護者の学校教育への意識が変化

コロナ禍以降、「学校に行きたくないことがある」という子どもが増えている。その要因として、友だちとの人間関係に疲れていることが、調査データから見えてきた。また、保護者の学校教育に対する意識の変化が起きている可能性もベネッセの調査から明らかになった。

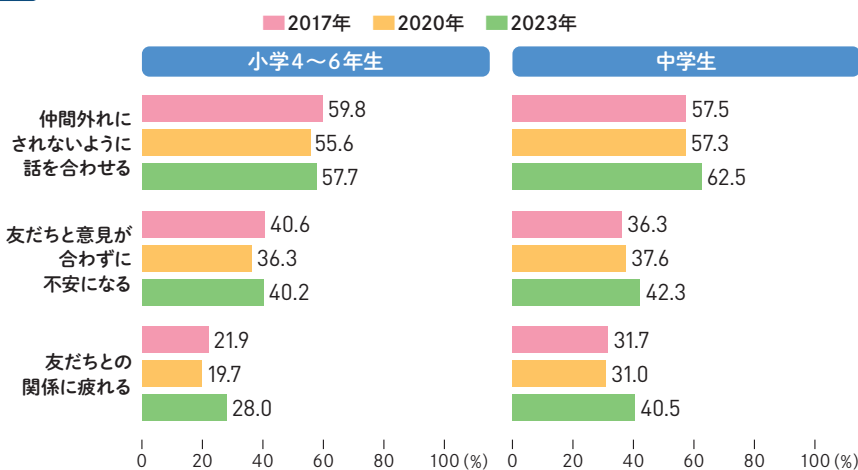
1 学校は好きだが、「学校に行きたくないことがある」という子どもの比率が増加

図1 子どもの学校や学びに対する意識（学校段階別）



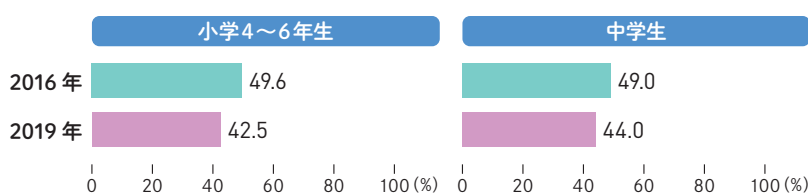
注) 数値は「とてもあてはまる」+「まああてはまる」の合計%

図2 子どもの友人関係に関する意識（学校段階別）



注) 数値は「とてもあてはまる」+「まああてはまる」の合計%

図3 「少し体調が悪くてもできるだけ学校へ通う」の肯定率（学校段階別）



注) 数値は「とてもあてはまる」+「まああてはまる」の合計%。

友だち関係に気をを使う子どもたち

文部科学省の調査結果では、不登校児童生徒がコロナ禍以降に増えていることが明らかになっている。そこで本調査では、子どもの学校に対する意識に関する項目の変化を見ていく。2017年調査から2023年調査にかけて、「自分の学校が好きだ」、「授業が楽しい」の肯定率は、ともに高い割合で推移していた（図1）。

一方、「学校に行きたくないことがある」の肯定率は、2017年調査では小学4～6年生、中学生ともに3割超だった。コロナ禍で学校が臨時休業になった影響か、2020年調査では低下したが、2023年調査は2020年調査より、小学生4～6年生は6.6ポイント、中学生は11.8ポイント増加した（図1）。

学校に行きたくない理由として推測されるのが、友だちとの関係だ。コロナ禍以降、学校段階に関係なく「友だちとの関係に疲れる」の肯定率が上昇している（図2）。特に、中学生はその傾向が顕著で、友だちとの関係に気を使っている様子がうかがえる。

子どもの通学に対する認識が変化

「少し体調が悪くてもできるだけ学校へ通う」の肯定率が、コロナ以前から既に低下していたことにも注目したい（図3）。発熱などであれば休むことが必要だが、少しの体調不良でも無理をして学校に通わなくてもよいと考える子どもが増加していると言えそうだ。子どもは「教育を受ける権利」を持っているのであって、通学の義務が存在するわけではない。子どもの中で、「学校は絶対に行かなければならない」という認識が徐々に弱まっている可能性がある。

出典 「子どもと生活と学びに関する親子調査」

東京大学社会科学研究所とベネッセ教育総合研究所が共同で立ち上げた「子どもの生活と学び」研究プロジェクトによる調査。小学1年生から高校3年生までの親子約2万組を対象に2015年から毎年調査し、子どもの成長のプロセスとそれに影響を与える要因を明らかにしている。

◎詳細は下記ウェブサイトをご覧ください。

<https://berd.benesse.jp/shotouchutou/research/detail1.php?id=5438>



データ解説

ベネッセ教育総合研究所
学習科学研究室 室長

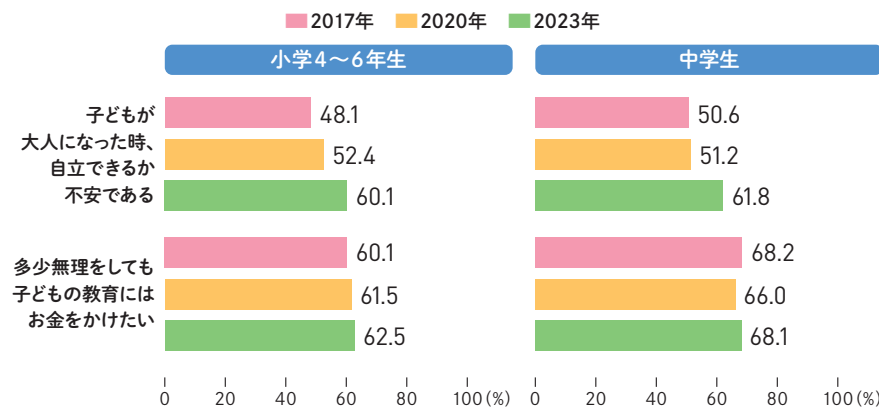
佐藤昭宏 さとう・あきひろ



子ども、保護者、学校が抱える教育・学習課題に関する調査研究や、学習理論に基づくカリキュラム・教材・研修開発に多数携わる。近年は子どもや大人の学習への着手や継続支援のあり方に関心を持っている。

2 保護者の教育熱心さは変わらないが、学校教育への意識に変化が生じている可能性も

図4 保護者の悩み・学校教育への期待（学校段階別）



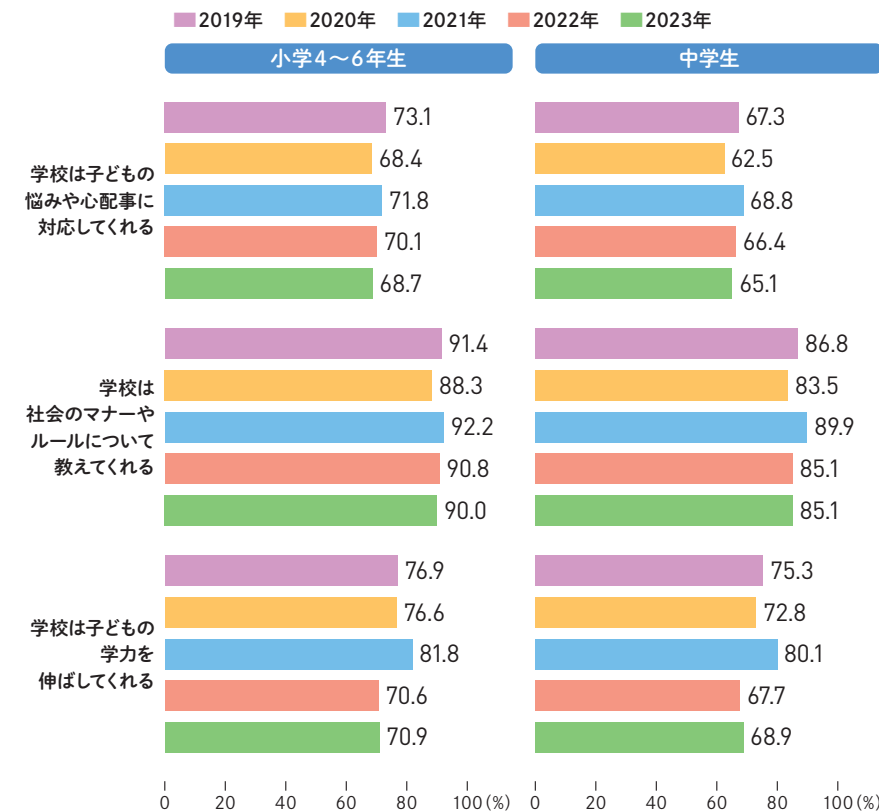
注) 数値は「とてもそう思う」+「まあそう思う」の合計%。

子どもの将来に不安を感じ、教育に投資

次に、保護者の教育に対する意識について見ていく。「子どもが大人になった時、自立できるか不安である」の肯定率が徐々に上昇しており、コロナ禍だった2020年調査から2023年調査にかけて特に上昇していた（図4）。長らく経済成長が停滞してきた日本社会において、子どもの将来を心配している保護者が増えていることが推測される。

そうした不安からか、教育熱心な様子は変わらないようだ。「多少無理をしても子どもの教育にはお金をかけたい」の肯定率は、コロナ禍前の2017年調査とコロナ禍後の2023年調査に、大きな変化はなかった（図4）。

図5 保護者の学校教育に対する意識（学校段階別）



注) 数値は「とてもそう思う」+「まあそう思う」の合計%。

学力向上に対する期待はやや低下傾向

ただ、保護者の学校教育に対する意識に質的な変化が生じている可能性がある。学校に期待することとして、「学校は子どもの悩みや心配事に対応してくれる」「学校は社会のマナーやルールについて教えてくれる」の肯定率に大きな変化はなかったが、「学校は子どもの学力を伸ばしてくれる」の肯定率は、2021年調査から2022年調査にかけて、小学4～6年生、中学生ともに10ポイント以上減少した（図5）。

コロナ禍の影響や価値観の多様化により、学校教育の価値が相対化されつつあり、子どもや保護者の学校教育に対する意識が少しずつ変化してきていると言える。様々な学びの選択肢が増える中で、学校教育を通じて育成すべき資質・能力は何かを改めて考える時期に来ているのではないだろうか。